

長崎市の地元の中学、山里中学に転校しました」と話している。

・救済なき神学ひとつ構築す 黄昏の心情の揺れにて

小紋さんの歌ではない。三枝浩樹さんの歌である。この歌について小紋さんが述べた文章がある。一九七七年七月の「短歌」臨時増刊号「現代短歌のすべて」の三枝浩樹論だ。三枝さんと小紋さんは一年違いで、ほぼ同年齢、その浩樹論は小紋さんが自分自身を率直に語り印象に残っている。例えば「暗さ、ということはいえ、それは三枝浩樹にのみ固有のものではない。それはわたしたち同世代のものにとって共通のものであった。(中略)わたしたちが生きている現実の中で人を想い、国を想うところが撓められるとき、ここはその反時代性ゆえに絶望的な在処に追いつめられる。そこに時代の暗さの根柢、暗いところのありかを見出すことができる」と。

この文章の後で、先ほど引いた浩樹作品を取りあげ、初出誌「REVOLVING」の連作「香きログス」を歌集『朝の歌』にほぼ収めながら何故この一首を削ったのかと問うている。忘れられない一首だったのである。小紋さん自身が「黄昏の心情の揺れ」の中で「救済なき神学」を求めていたことが十分

想像できる。救済あつてこそその神学と常識的には考えそうだが、小紋さんは「救済なき神学」を構築しなかったのだ。それを小紋さんは「永久革命」だとも言っている。

小紋さんをついて語った文章では一九八六年十二月の「アサヒグラフ」増刊「昭和短歌の世界」の高野公彦さんの「毒草」の本文が忘れがたい。毒草とはむろん小紋さんのことではなく、彼がベランダで栽培していたトリカブトのことである。高野さんは「茫洋とした生き方をしておいて、上昇志向を持ち合はせておかない人のやうで、私は何となく好感を持つてゐる」と書き出し、トリカブトなど何種類か毒草を飼っている「彼は奇人・変人だと思ひ、一層親しみを感じた」と記している。強引に結びつければ上昇志向のなさ、奇人・変人は「救済なき神学」を求める行き方の表れであろう。

「歌集なき歌人」だった小紋さんの『蜜の大地』は待望の一冊だった。前川佐美雄賞に決まり、筑紫歌壇賞に決まった。筑紫歌壇賞に関わっている私は、東京の授賞式の出席は無理でも、福岡の授賞式は可能ではないかと「心の花」長崎歌会の人たちと相談したが実現しなかった。そして、『蜜の大地』後の作品をぜひ読みたかった。彼

も歌いたかったはずである。一昨年お見舞いに行ったときに、新作をぜひ読みたいと言ったら、彼はうなずいてくれた。

『蜜の大地』は幾度も読み、拙文を記したこともあるが、今回またあらためて読んだ。『蜜の大地』二巻は小紋さんにとって「救済の神学」であつたと思いたい。ヨハネ小島義明氏は天に召されたと信じる。

- ・後の世まで見る夢ならいとけなきわが子無辜なることを喜ぶ
- ・いつくしむ記憶のひとつかはたれの麦畑野原に啼く揚雲雀
- ・死にてより良きことあらんうつし世に有りの実は瑞々しくあり
- ・柑橘のみどりの智慧につつまれて熟れゆくときはみな孤独なり
- ・つつしみて一日経なんと窓によれば永遠とこしへの雲ぞと思ふ



通夜の浦上天主堂